お客様が思い描く未来への案内人でありたい

「関わる誰もが幸せに」と願い、人とのつながりや信頼関係を大切にする経営方針を貫く織田真澄代表取締役。企業活動とは別に、出産時のトラブルで重度の心身障害を負い、8年前に亡くなったご長男の子育て経験から、西条町の「障害児通所支援Yu~Ki」の立ち上げに加わるなど社会福祉活動にも取り組んでいる。

全国的に人口減少が進行する中、4つの大学や研究機関・多彩な企業が集まり、教育環境や交通網が整った東広島市は、地方圏の中で人口増加が続く数少ない街の一つです。

JR西条駅前にある株式会社東洋不動産は、まだ市内に不動産会社が少なかった90年代初めに開業。宅地造成販売、不動産売買・賃貸仲介などを通じて街の持続的発展に少なからず寄与してきました。

「地域を隅々まで知り尽くした地場の不動産会社にしかできない生活者目線の情報提供や細やかなご提案、そしてお客様にとことん寄り添う姿勢が当社の特長でしょうか。寄り添い力はどこにも真似できない自信があります」と代表取締役の織田さん。"お客様が思い描く未来への案内人でありたい"と、同社では接客の仕事を暮らし・ナビ(案内)・ビスタ(展望)を組み合わせた『くらしナビスタ』と名付け、あらゆる相談に対応。時にはご高齢の家主さんにパソコンの使い方を指南したり、一人暮らしの方の様子を見に行ったりすることもあるそうです。

近年力を入れているのは、終活や相続の相談対応。創業時からの地主・家主さんが世代交代の時期を迎え〝後継者がいない〟〝相続税が心配〟といった相談が増えているためだとか。的確な助言をするためには常に勉強が必要と、社員全員がスキルアップや資格取得に取り組んでいます。

そんな親身な対応を積み重ねた生まれる「信頼」が、売買・土地活用などの新規案件や紹介につながっていく同社の強みでもあります。

目下の課題は、宅地や売買物件の安定供給。特に中心部の西条・八本松エリアはニーズが高いにも関わらず家を建てられない区域が多く、供給が追いつかないのだとか。

「リトル東京のような街を目指すのではなく、周辺エリアを含めた土地利用を再検討し、地域の特性を活かした東広島独自の住みやすい街にしていきたいですね」と織田さん。街づくりの一端を担う企業として、そうした構想を形にする案を練り、要望として行政や関係機関へ働きかけを続ける「行動の人」でもあります。

また会社の事業とは別に、障害児や認知症の高齢者の支援活動を続けてきた織田さんの夢は、両者の支援を一体的に行う新しいケア施設の建設。誰もが安心して笑顔で暮らせる街づくりを目指し、織田さんは今日もフル稼働です。

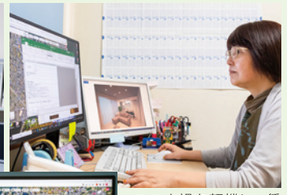
芸術系の大学で学んだ織田さんが自らインテリアをコーディネートした物件。リフォームした中古住宅のイメージアップに一役買っている。時にはインテリア小物を自分で製作することもあるという。

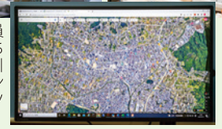
織田さんが応援してきた2つの施設の活動を紹介するパンフレット。

株式会社東洋不動産

1991年に開業。宅地造成販売、不動産売買・賃貸仲介、賃貸アパート管理・経営など幅広い事業を手掛ける。来年1月西条栄町に移転する新店舗は2倍の広さになり、終活や相続などのセミナーも開催できるスペースを設ける予定。

東広島市西条本町14-29
☎082-423-8322





スタッフの布陣は正社員3人、パート2人、そのうち4人は女性。宅地建物取引士、相続支援コンサルタント、不動産キャリアアドバイザーなどの有資格者も多い。

コロナ禍を契機に、賃貸管理や契約申込、お客様との連絡などでIT活用を推進中。活用できる土地や管理物件の把握もWEB上で。

再生医療×リハビリロボットで「完治」できる医療へ

「会社を切り盛りすることになろうとは、私自身びっくりです(笑)」と河原裕美代表取締役。薬学科の博士課程在学中に研究データの解析が縁で弓削研究室に移籍し、博士号(保健学)を取得。初代門下生でもあり、2005年に有限会社として創業した際、代表取締役の要請を受けた。NASAのサイトには河原さんが09年に発表した世界初の無重力環境を使った再生医療の研究論文が掲載されている。

歩行動作における足首の機能に着目し、早稲田大学と共同開発した歩行補助装置RE-Gait®。足を振り出すときにつま先を上げる動きを歩行のタイミングに合わせてアシストすることで、スムーズで自然な歩行が可能になる。

足裏のセンサ情報を元に、患者さんの状態に応じて最適な歩行プログラムを設定できる。今後は手指のリハビリ用ロボットの開発にも着手するそうだ。

広島大学の霞キャンパス内にオフィスを置く株式会社スペース・バイオ・ラボラトリーズは、最先端医療の一助となる製品開発を続ける大学発のベンチャー企業です。

「畑違いの分野の研究者だった私がまさか経営者になるとは、自分でも驚くような展開です」と苦笑しつつ事業について説明してくださったのは、代表取締役の河原さん。同社が目指すのは「完治できる医療」。そのための解決法を提供する事業の軸となるのは、同社取締役で広島大学宇宙再生医療センター長の弓削教授が中心となって開発した2つの製品です。

1つは、再生医療に用いる幹細胞培養のために開発された重力制御装置『グラビラボ』。再生医療とは、全ての細胞の元になる幹細胞を用い病気やケガで失われた組織を再生する最先端医療技術で、完治が困難な疾患に新たな道を開く治療法と期待されています。

弓削教授は無重力環境にいる宇宙飛行士の骨が脆くなり筋肉が痩せる現象、つまり細胞の分化が抑制されることに着目。その環境を利用して育てると神経や骨になる幹細胞を未分化のまま培養が可能では?と考えたのが装置開発のきっかけでした。当初は「クレイジー!」と一笑に付された研究も、やがてネイチャー誌等で発表した論文が世界中から注目を集め、真っ先に装置の注文があったのは、なんとNASAのケネディ宇宙センターだったそうです。

もう1つは世界最小・最軽量の歩行補助装置『リゲイト』。再生医療とロボットによるリハビリを組み合わせることで、脳卒中等の後遺症で歩行が困難な患者さんが歩けるようになることが期待されています。実際にリゲイトを導入した病院では短期間でうまく歩けるようになる患者さんが増えているとか。

「私たちの原動力は、寝たきりの患者さんを減らしたいという想い。まずは国内に普及させ、再生医療とロボットリハビリテーションを統合した新しい治療法を確立していきたい」とまっすぐに目指すゴールを見つめる河原さん。企業経営の知識も経験もゼロからのスタートでしたが、持ち前の探究心と粘り強さを武器に、資金調達や特許申請などの実務を一手に引き受け、ビジョンの実現に向け弓削教授と二人三脚で歩みを進めています。

宇宙再生医療に挑む弓削教授と、薬や遺伝子操作に頼らず幹細胞が培養できる世界初の装置Gravite®。今日では再生医療研究のほか創薬や植物の栽培等の研究開発ツールとして活用されているという。

株式会社スペース・バイオ・ラボラトリーズ

2005年創業。弓削教授の四半世紀にわたる研究成果を再生医療のバイオ・テクノロジーに応用。さらに細胞移植後の効果的なリハビリを実現するロボットを開発し、脳卒中等の中枢神経系疾患の完治を目指す新しい治療システムの構築に取り組む。

広島市南区霞1丁目2-3
広島大学霞総合研究棟210号室
☎082-257-1501